冬あたたか

大佛次郎自選集　現代小説　第8巻

朝日新聞社

大佛次郎自選集　現代小説
第八巻　冬あたたか
全十巻・第四回配本
一二〇〇円

昭和四十八年一月十日発行
著者　大佛次郎
装幀者　原　弘
発行者　角田秀雄
印刷所　明善印刷
製本所　松岳社
製函所　加藤製函

発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

0393-240138-0042

大佛次郎自選集　現代小説　第八巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第八巻目次

冬あたたか

冬あたたか

コックリコ

後の座席で江見四郎がつぶやくのが聞こえた。

「麦畑には違いないのだが。なんとも、ゆたかな景色だね。日本の田舎にも、こんなところがあるだろうか？」

運転台でハンドルを握っていた画家の折竹は、助手台に並んで腰かけていた関口に煙草を出させて口にくわえさせて貰い、ライターの火を受けようとしていた。風が吹込んでいて、うまく火がつかなかった。自動車は九十キロの速力を出していた。

麦畑は道の左右に遠く地平までひろがっていた。麦畑のほかに何もないのだが、これが大きく美しくうねって、六月の空と地面をかぎり、ふっくらと厚味のある曲線を描いている。山が遠いので、森でも見えぬ限りは、麦畑が地平線を限って見せた。

夏を迎えた麦畑は、穂を夕日に光らせ、まだ青々とした中に、上べりに金の色を流していた。その光のせいで、美しく見えたわけでなく、大地を一面に埋め尽した畑が豊満な風景なのであった。パリから離れないところにあって、このあたりはフランスの穀倉と呼ばれている。

「日本のはもっと野が起伏がなく平たいよ。その上に、麦畑だけでなく、何か、他のものが見える。山があったり、村があったり」

折竹が、やっと火がついた煙草をすう間から、こう答えた。

「母なる大地なんて言うが……正しくここのは地面が女性だよ。日本にいたら、そう感じないだろう。見たまえ、女のからだの曲線だ。僕も、よく、そう思うのだ」、

「さっきから、あの紅い花が気になってた。何の花だ？　芥子か？　麦の中に、ところどころに咲いてる紅い花があるだろう」

「コックリコですね」

と、年の若い関口が言った。

「やはり、芥子の花ですね」

「フランスの田舎の、どこへ行っても、今時分、麦畑の中や、道ばたの草むらに咲いている。コックリコと矢車草だな、血のように紅いのと、紫色したのと。……印象派のモネが描いた画にもある。ルノワールにもある。フランスの田舎を描いたら、どうしたって、出て来る」

こう言いながら、折竹はサングラスをかけた顔を振向けて、車の後方を見た。

「あ、見える。見える」

と、ひとりでうなずいて自動車の速力を落して道の脇に停めた。

「江見君も降りて見たまえ。君のホテルの部屋に、コックリコの花を取って帰ってもいい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

音と速力から急に切り離されて、夕方の麦畑の中の静かな道路に降りた。

「あれだよ、君」

と、折竹が、ずっと後の地平を指さして江見に知らせた。

「さっきのシャルトルの堂が見えてるだろう」

最初、江見には何が見えるとも分らなかったが、今日の午後、折竹たちの案内でパリから訪ねたシャルトルの寺院が、麦畑が描く長い地平線の空に、寺と、その塔だけが幻影のように浮き出ているのを認めた。夕方の空に明るく影だけのものだったが、かくも遠くから大きく見えるものかと、素直に驚きを知った。人間の建てたものが、自然の展望の中にこれだけ大きく力あるものに見えるのかと。

「この辺が、シャルトルの寺を見るのに、昔から有名な地点なのだ。僕らは別の道からまわったから、帰り道にこの景色を見たわけだが……」

折竹は、こう説明した。

「この道をパリからドライヴして来ると、行く手の地平線に、あの寺が段々と現れて来る。あの寺院だけがだね。その他のものは見えない。シャルトルの町の人家は、側に行くまで見えないで、あの二つの塔のある大伽藍だけが最初に見えて来る。もっと昔、馬車ぐらいしかない時代に、パリだの、よその地方からシャルトルまいりに遠い道を歩いて来た善男善女がね、麦畑の中の長い道をたどって来て、ふいに、あの大寺院を幻のように地平に見つけた時はね、まったく敬虔な思いに充

たされて地にひざまずいて祈る気持になったろうと思うのだ」

「……」

「出現……って感じだ。考えなかったものが目の前に現れたのだ。あれだけ気高(けだか)く美しくて堂々とした御堂がね」

異議なく、江見も、この同窓の友人に同じ感動を見せてうなずいて見せた。

若い時からの友達で、他のことには悪口も言い合い、反語で話すことが多いのだが、すぐれて美しいものの前に、ふたりして並んだ時は素直に感動を分ち合うことが出来たのも、古い交際からであった。

折竹がコックリコの花を集めに畑の中に入って行ったのも、しばらく江見は気がつかずに、この遠い地平の寺の影に見とれていた。

一台の自動車が、その方角から風を巻いて疾走して来て、見ている間に近くなり、三人が立っている畑の脇を過ぎて行った。

「彼女でしたね」

と、関口が言う前に、江見も運転台に乗っていた人間に気がついていた。新型のアメリカの車であった。その間にも後姿を見せて小さく遠ざかって行く。

「あの女が運転してたね」

江見の言葉には、驚きがこもっていた。

関口は、とぼしい給費を受けて、ソルボンヌ大学でフランス文学の勉強をしている青年なので、自分と年の頃も同じぐらいの若さでパリに来て新型の自動車を自分で運転し贅沢に遊び歩いている大田物産の第二世とかに前から嫌悪を感じているのだった。自分の車があれば、女が自由になるとか言われる現代が、彼には、いとわしかった。

「旅行者か？」

江見は、女のことを問題にした。

関口は首を傾げて、

「そうでない。前にもオペラ座の廊下で見たことがあるように思うんです」

その返事だけでは、すまなかった。

「もっとも、オペラ座なんて、僕はパリに、もう一年もいて、たった一ぺん行ったきりなんですがね」

江見たちはシャルトルの寺院の中で、その女性を見かけた。フランス人ばかりあたりに見ている目に、めずらしく日本の若い女を見たと言うだけでなく、妙に魅力を感じさせて、すれ違ったのだ。石を積んだ伽藍の内部は、夏の光のまぶしい外から入ると急に夜になったように暗い。その闇の中から有名なステインド・グラスをはめた窓が、高い壁にいろいろの宝玉が輝き出たように外の光を透かして、色のさまざまの星空を仰ぐようにも見え、色彩の雨が降り込んでいるようにも見えた。堂内の参詣人は影のように暗く、近付いて、わずかに顔が見えるほどで、女が側まで来てから、江

見も日本人だと気がついた。すると、外国人にはない優しさが、皮膚を透かしてこちらの軀にエーテルのように滲み込んで来たような感じであった。黒い目、黒い髪、とがってない柔かい鼻、おだやかで愛くるしい唇。

男の連れが、日本人で背のひくい、年も若く何となく不遜な表情で側にいたことは、ずっと遅れてから気がついたほど、女はこちらの目を奪った。

画家も関口もその男を知っていた。大田物産の社長の息子とかで、東京に置いても碌なことをしないので遊び半分にパリに追いやられて来た。こう言う評判であった。そのふたりを乗せた自動車であった。

画家はまだ熱心に麦の間のコックリコの花を江見のために抜いてやっていた。

「芥子の花は毒だろう、君」

と、声をかけると顔を上げて、

「いじった手を、口に持って行かなけれアいいんだよ」

「さっき寺で見た女が、通って行ったぜ」

画家はその話を問題ともしないで、畑から出て来た。集めたコックリコの茎を手でそろえている。一緒に抜いてしまった麦の穂が紅い花の間に入っていたのが、美しい色の取合せとなった。

自動車はランブイエの森の間の道路を通った。パリに近いが、まだ鹿や狐、兎が住んでいて、今

も大統領の狩猟場になっていると聞いた。緑の深い森の中には、迷い易い道や、釣も可能な天然のままの池が幾つもあるのだ。

麦畑の中を通る時もそうだったが、樹や草の香が、風と一緒に自動車の中に絶えず流れ込んで来ていた。それが、間もなく、夕方の燈火をともしたパリの街路に入る。まだ空気が青い匂いを残している。と江見が感じたのは、芥子の花と麦の穂の束が車の中に置いてあるせいだった。

「コックリコとは、おもしろい名だね」

と、江見が言い出した。

「何から付けたのか？　居ねむりでもしていそうだ」

「そんな感じもあるじゃないか？　芥子の花に」

と、折竹が受けた。

江見のホテルに送ってくれると、画家は自分も運転台から降りて来て、受付にいるフランス人の小母さんに、江見の部屋に花瓶を貸してくれるように頼んだ。

医学が専門の江見教授は、ドイツ語を話したが、フランス語は読むことが出来ても会話は不自由であった。折竹が代って用を足してくれる。

「では、八時頃、また迎いに来るから、それまでに風呂にでも入って、ひとやすみしていてくれたまえ」

「何もかも頼むよ」

「ムッシュウ」

と、受付の小母さんが呼びかけて、江見の部屋の鍵に添えて、メッセエジの紙片を渡した。

江見は自動式の狭いエレヴェーターに慣れないので、狭い階段を歩いて昇りながら、メッセエジを読んだ。

フランス文だったが、マダム桐山に電話をくださるように、と書いてあった。桐山登美子は、オペラ座に近いホテルに泊っている。

英語で話が通じるが、電話を申込むのが、外から帰って来たばかりの江見にはおっくうな仕事に感じられた。桐山夫人は彼と同門で早くから赤坂で病院を経営している友人の細君だったが、夫と別れて洋裁店を出して成功して、半年ぐらい前から、アメリカ廻りで、パリに、下着の研究に来ていた。江見が来たのも大使館で聞いて、昨日訪ねて挨拶に来たのであった。

部屋に入ると、江見は服を脱いで日本の浴衣にくつろぎ、バスルームの湯の栓をひねりに行った。ひと風呂あびて、寝るつもりであった。その前に、下の小母さんがドアをノックして、頼んであった花瓶をとどけて来てくれた。

すると、電話のベルが鳴り初めた。

受話器を取り上げると、

「アロ、アロ」

と、フランス風に呼んでいるが、声から桐山登美子と江見にはわかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com